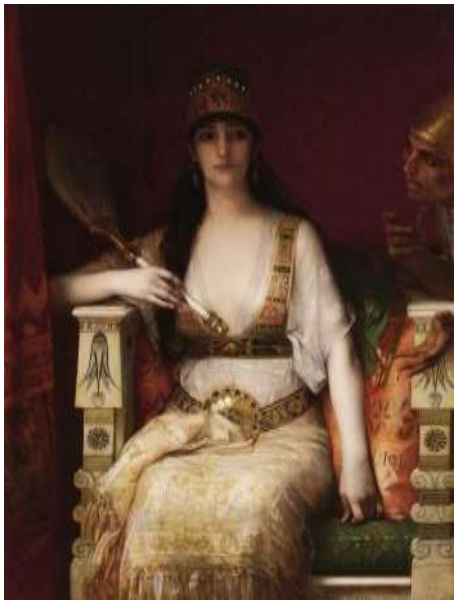
旧約聖書を読んで感じること　(121)　　悲しいエステル



王を拒むワシュティ Alexandre Cabanel

エステル記を読むと、豪華絢爛たる栄耀栄華のペルシャ帝国の王妃となったと言われるエステルの姿に、愛する家族のために身を売った貧しい少女のイメージが重なります。エステルは両親がすでに亡く、従兄弟のモルデカイが養女として育て、将来は結婚したいと願っていた美しい娘でしたが、クセルクセス王（在位:486－465BC）の王妃となりました。歴史的記録はありません。

この経緯に至る出来事が事細かに記されています。権勢を誇るペルシャの宮廷のまがまがしさ、下らなさが露骨に描写されています。127州を擁する帝国の王は大臣、家臣、軍人、貴族、高官の前で半年間も酒宴を開き、繁栄と権力を見せつけて、酔いしれています。酒宴の終わりごろに美しい王妃ワシュティを、皆に見せようと召し出そうとしました。ところが彼女は王の命令を拒否しました。満座の中でメンツを潰された王は、王妃への処分について、王の側近の大臣に審議させます。あたかも会議制があったかのようですが、家臣は王にへつらい、忖度しているにすぎません。ワシュティの退位と新王妃の選定が決定し、すべての州にこの勅書が送られました。捕囚解放から半世紀を経ていますが、勅書が各民族の言語、文字で書かれていたという箇所にキュロス大王の威光が残っています。

やがて勅書によって、大勢の娘たちと共にエステルも、都スサに集められました。どのようにして集めたのでしょう。エステルはユダヤ人の出自であるということは伏せていましたから、ユダヤ人がペルシャで生活するには並大抵ではないという一面が判ります。エステルの控えめで清らかな美しさは後宮の監督にも気に入られ、特別に目をかけられました。1年間、食べ物、美容の期間を与えられ磨きをかけて、王の召しを待ちます。これからエステティックという言葉が生まれたそうです。召しを受けた時に、望む物はなんでも与えられ、夜行き、朝は別の後宮に住むことに決められていました。これはハレムの性奴隷の生活です。結婚を望んでいた従兄弟のモルデカイにとっては、大変な痛手でしょう。エステルが気になり、絶えず後宮の庭の前を行ったり来たりしていました。

エステルは王の目に適い、寵愛を受け、ワシュティに代わる王妃となりました。けれども再び若い娘が集められた時のことである。（エス 2:19）とあるようにハレムはますます盛んでした。この折、王宮の門で、モルデカイが王の謀殺の計略の情報を得て、それをエステルに知らせました。エステルはモルデカイの名で王にこれを告げ、早速この件は捜査され、首謀者は処刑され、この件は宮廷日誌に記入されました。モルデカイが王にとって命の恩人になりましたが、報奨は授けられませんでした。

その後、クセルクセス王はアガグ人ハメダタの子ハマンを引き立て、同僚の大臣のだれよりも高い地位につけた。王宮の門にいる役人は皆、ハマンが来るとひざまずいて敬礼した。王がそのように命じていたからである。しかし、モルデカイはひざまずかず、敬礼しなかった。（エス3:1）後に判明するように、ハマンは自らの意思を果たすために、巨額の金を国庫に納めますと王に申し出て、王はその金のためにハマンを厚遇したのでしょう。王はハマンに膝づいて敬礼せよと命じたというのです。この件では大臣の審議がなされたとは記されていません。モルデカイはこれに反抗しました。理由がエステル記には記されていませんが、続編キリシャ語訳のエステル記には、わたしがひれ伏さなかったのは、神の栄光の上に人の栄光を置かないためでした。わたしは、主であるあなたのほか何人にもひれ伏すことをしません。（エス C 7）と記されています。そして、このとき始めてモルデカイは自分がユダヤ人であることを明らかにしたのです。愛するエステルを奪われ、残されたのは信仰の誇りだけでした。